

成 果 報 告 書

【令和4年度教育改革推進事業経費】 a 学部・研究科プロジェクト

所属部局	観光学部	代表者氏名	八島 雄士
事項名	学部と博士前期課程とのカリキュラム接続を円滑化する仕組み開発事業 - インストラクショナルデザインを視座に		
当初計画に対する目標達成率	75%	事業の終了時期	令和5年3月
予算配分総額	580千円	経費使用総額	580千円

【事業の成果】※具体的に記入してください。

本事業の成果を、10～14期生を対象としたグローバル・プログラム（GP）についての検証・総括（GP成果検証という）、Global Program(GP2.0)の成果検証プロセスのデザイン（GP2.0成果検証デザインという）、博士前期課程との接続を含むモニタリング及び成果検証方法の検討（カリキュラム接続の成果検証方法検討という）の3点から述べる。

まず、GP成果検証について、第一に、Instructional Design（IDという）の考え方を基礎に、「学習者設定→学びの仕組み→学修成果」をサイクル化した検証モデル（検証モデルという）を考案し、GP2.0にも適用を試行できた。第二に、検証モデルにしたがい、GPの設置の背景や特徴を明らかにできた。修了認定について、運営側が想定するRank 80以上を目指してほしいという目標に対して、実際には、LPP(Local Partnership Program, ILLIP)の活動などへの参加や学生生活もあり、Rank 60が最も多い分布となっていることがわかった。第三に、本学の質保証部会が作成した成績評価検証ツールを用いて成績評価の傾向を分析したところ、合格者GPAが高い科目や低い科目について、英語科目に固有の特徴は見られなかった。一方、F評価が多い科目では、受講学生の英語力不足を補うため、科目ごとに必要な英語力提示や英語力向上の助言を行うことで、学生が自主的に科目登録を判断していた傾向が分かった。ただし、集中講義については履修取消できないことやコロナ禍で開講時期が変更となり、諦めた学生が増えたことでF評価が増えたことが推察された。

次に、GP2.0成果検証デザインについて、第一に、GPに関わる担当教員へのインタビューから博士前期課程への接続を前提に課題を洗い出し、①学生を厳選すること、②GP科目を厳選すること、③成果となる能力やスキルを明確化することの3点を検証モデルに沿って抽出した。第二に、GP2.0の特色に応じた成果検証のデザインとして、①学習者の特徴、②科目群ごとの特徴把握と傾向分析、③選択したキャリアごとの特徴把握と傾向分析の3点を議論のたたき台として考案し、IDの先進的な研究を行っている教員（ID専門家という）からコンサルティングを兼ねてコメントしていただいた。結果として、第一に、学修成果について、学びを記録し、その内容を示したデジタルバッジというツールがあること、第二に、学びの仕組みについて、学生が主体となり自ら学びをデザインさせること、その際に外部へ情報発信し、そのリアクションを享受することで、学びへの意識や意欲を向上させる仕組みとすることが重要であること、第三に、学習者の設定について、卒業最低単位数外としてGP2.0の科目を設定することによって、より意欲の高い学生が参加し、より高い満足を与えることにつながる可能性があることがわかった。

最後に、カリキュラム接続の成果検証方法検討について、R5年度からスタートする新カリキュラム（研究理論科目、研究技能科目を新規設置）を前提に、今後の課題を抽出した。第一に、学修成果を向上させる工夫として、高等教育について先進的な取り組みをしている大学の視察から、環境づくりが重要であることが明確となった。特に、図書館との連携はすぐにでもできる課題の1つとして参考にしたい。加えて、ID専門家からのコンサルティングやコミュニケーションにより、IDに関する知識やスキルが不足していることが分かった。また、ID専門家からの助言のなかで、GP関連科目を卒業最低単位数外とすることで、博士前期課程の科目を入学前に先取りで単位修得する仕組みとすること、結果として、進学する誘因となる可能性を指摘いただいた。

【当初計画段階との対比】※上記目標達成率を判断した理由等

当初は、GP2.0から博士前期課程への接続を中心にIDの考え方にに基づき、データ収集し、成果検証方法等を検討する予定であったが、審査プロセスにおいて、GPの検証・総括を行うべきとの意見があり、同時並行で進めることとなった。そのため、当初予定していたデータ収集（卒業生、他大学）まで手が回らなかった。また、ID専門家や教育工学の専門家のスケジュールリングについて、新型コロナウイルス感染症への配慮のなかで苦労した。

結果として、ID専門家のコンサルティングが年明け以降で調整し、なんとか3月に入って実施できたことで、IDに関する知識やスキルの不足に気づいたことや、うまく出てくることとできていないことが分かったこと、我々

では知らないアイデアや考え方を指摘いただく機会となったという意味では良い成果となった。また、高等教育（特に、大学院教育）では先端的な取り組みを行っている名古屋大学高等教育センターへの訪問ができたことにより、GP2.0から博士前期課程への接続、特に、アカデミックスキルの向上への取り組みを知り、今後の成果検証に環境整備を加える必要性が分かった。

以上、当初計画に加えて実施すべきことが増えたなかで、ある程度の成果は得られたことを考慮して75%の達成度とした。

【今後の展望等】

○本事業の発展性

本事業の発展性を、カリキュラム接続を円滑化する仕組みとして、データ収集と分析の観点から述べる。まず、本年度にIDの考え方を参考に検証モデルを考案できた。また、データとして成績評価検証ツールを使うことで量的情報を得ることができた。2023年度はGPを履修した学生が卒業する最終年度となる。また、2021年度に入学した学生が3年目を迎え、GP2.0に関する量的情報が増える。そのため、検証モデルを使いながら、GPおよびGP2.0についてデータ収集と分析が豊富になる点に第一の発展性がある。加えて、検証モデルに沿って、学習者、学びの仕組み、学修成果に関する質的情報を収集することで、考察がより深くなる点に第二の発展性がある。さらに、博士前期課程の新カリキュラムを実施するなかで得られる情報をもとに、GP2.0の考え方を基礎とする接続の円滑化について考察を行うことも可能となる。

○改善すべき事項

今年度の事業で実施に手が回らなかったことが改善点となる。第一に、GP卒業生からインタビュー等を通じて質的情報を入手できなかった。この点は、オンライン面談などを使いながら継続して情報収集をする。第二に、他大学のカリキュラムの情報収集ができなかった。この点は、検証モデルを考案したことで、情報収集のポイントを明確化できたことを生かしてより質の高い情報を得るように心がける。加えた、ID専門家とのネットワークができ、質の高い情報を得るチャンネルが増えたので、学会等での報告などを通じてその環境を活かしたい。

○実施成果の教育課程への改革・改善への提案及び今後の予定

IDの考え方を参考にすることで、議論のポイントを明らかにした上で意見交換が可能となる。例えば、検証モデルは、他学部等で利用可能である。また、成績評価検証の情報収集や考察を行うポイントを明確にすることも可能である。今後は、GP、GP2.0、博士前期課程カリキュラムの3つの関係性を土台に、学内外での情報収集と分析・考察を継続する。特に、教育工学に関わる学会等での報告や論文投稿により、より質の高いコメントをいただくことを考えている。また、成果検証ポイントとして、環境整備の課題についてもできるところから取り組んでいきたい。

○その他特筆すべき事項